

中世・草戸千軒探検 25

～あきな商うもっかん（木簡にみる金融取引）～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ700年前の鎌倉時代後期を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復原するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活の様子を詳しく紹介して

います。

前回に引き続き「商う」のコーナーを紹介します。今回は、遺跡から数多く出土している木簡から、集落における金融活動を見ていくことにしましょう。

草戸千軒町遺跡からは、木の札に墨で文字などを書いた「木簡」と呼ばれる資料が数多く出土しています。木簡に記されたことからは、一般的に短く、断片的なもので、全体像を把握するのは難しいのですが、商品名やその数量・金額などが記されたものが多くを占めていることから、この集落を拠点に活動する商人や金融業者たちによって記されたものであることが明らかになってきました。

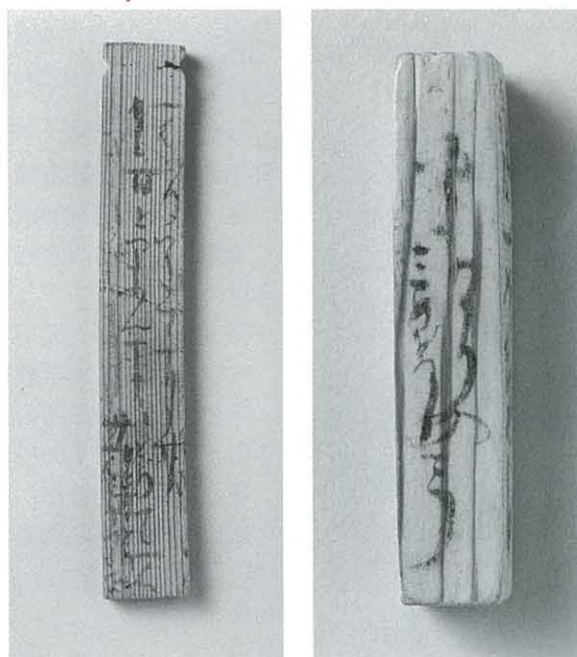
写真1はその代表的なもので、鎌倉時代末期の資料です。巳年の8月23日に400文（銅銭400枚）を貸し付け、10月20日にその利子が倍になったことなどが記されています。貸し付けの詳細については不明ながら、本来は5%の利子で契約していたことなどがうかがえます。

こうした木簡は、商人や金融業者による一時的な記録で、現代の伝票やレシートに相当するものと考えられます。こうした記録をもとに合理的な帳簿が作成されていたはずですが、大切に保管されていたはずの帳簿は伝わっていません。役目を終えてゴミ捨て穴に廃棄されたメモ書きが、発掘調査によって偶然日の目を見ることになったのです。

鎌倉時代の木簡は、写真1のような短冊形の板の上部に切り込みを入れたものがほとんどですが、室町時代になると、写真2のように角柱形の材の上部に孔を開けたものが大部分を占めるようになります。一時的なメモ書きである木簡は、役目を終えるとナイフで表面が削られて再利用されたため、薄い短冊形の札よりも、何度も繰り返し使える角柱形の札へと変わっていったようです。

商品や金融取引の現場に関する情報は、紙に記された文書、いわゆる古文書からはほとんど知ることができません。そのため、当時の地方集落における経済活動の実体を示す資料として、草戸千軒町遺跡出土の木簡はきわめて貴重なものなのです。

（主任学芸員 鈴木康之）



左【写真1】鎌倉時代（14世紀前半）の木簡
右【写真2】室町時代（15世紀後半）の木簡